

枕蹊雜話

六

梅

家傳

庫文閣内			
五	三	和	
九	四	書	
函	〇		
四	八	架冊號類	
架	冊	號	類

内閣文庫			
番號	和	34102	
冊數	8 (6)		
函號	159	58	

第十

共八



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



桃陰雜話卷之六

一義公御帰國ノ昂故アリテ御参勤御延引遊サ

レ度昔公邊ノ仰セ達サレケルカモハヤ御登駕前モ三四日ニ

セマリケレニ御左右ナシ其比佐野甚工門ハ易学ニ通

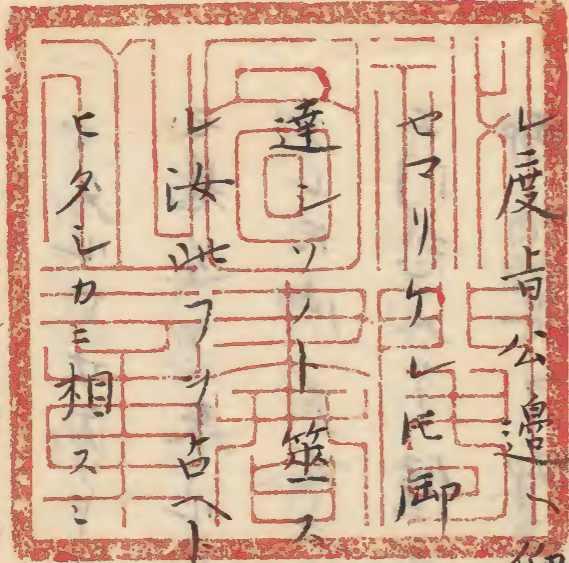
達シソノト筮フル処百中ノ聞ヘアリケレハ甚工門ヲ召サ

レ汝此ヲヲ古ヘト仰セラレ甚工門筮シテ申上ケルハ御願

ヒタシカモ相スニタリト云然ルニ御登駕宵日ニ至レニ御

左右ナシ甚工門ヲ召レ弥明朝登駕ノ処今ニ御サタナシ

汝カ占ヒ此度ハハツレタリト仰セラレケレハ否外レハ不



仕度ヲ御覧アルヘシト申上退出ス翌朝イヨク御登駕
ニ付甚エ門モ御目通ニ拜伏ス公仰マシ是ニテモ願ヒス
ミタルヤサテク情ノ剛キ者カ夫トテ御出馬アリ甚高
モ見送り奉ル小幡御殿ニ着御甚エ門ヲ召シ是レ迄キ
タレ凡御左右ナシ情剛モ事ニヨルト御不奥ノ仰セ甚
エ門恐入り候ラヘ凡最早御左右ニ御間モアルニ暫シ
御酒宴ヲ御設ケ御待アルヘシト申上ル公然ラハ済マ
サル時ハ汝江戸コテ供スヘシトアリテ御酒宴初リヤ時
ヲ移セシニ奉書到来御延引御勝手タルヘキ嚴命ナ
リケルニ公甚御機嫌ウルワシク甚エ門カ占筮ヲモ感

シ玉ヒ夫ヨリ御帰城アリシト也 小池氏筆記

一 中島平次為貞軒ト号ス知名ヲ瀬戸之助ト云テ久
昌寺ノ小姓ナリ 義公其ホアルヲ愛シ玉ヒ屢
金ヲ賜ヒテ書箱ノ料トス酒泉彦太夫弘ノ誣ニア
リテ学フ一日佐藤平エ門庸言其慮ヲ訪フニ書
箱又其寝所ノ被ヲモリノマニ置タリ庸言アマリ
ノ事ニ思ヒテト取片付ラレテハ如何ト云ハ為貞コレ
一 フ片付ル間ニ公書教行ヲ讀ムヘシテ予亦陰ヲ惜ムナ
レバ左様ノヒマナシ若シ是ヲムサシト思ハレハ重テ来
ラルマシト云ヒシトナリ其篤志カクヤ如シ遂ニ書

藍ノ誉レアリ。後總裁トナリ國史ニカキ盡セシカ不
幸ニシテ壯年ニテ没シ子無ク後絶ス。春日得聞
一義公御代ノ比カ小宮山仁工門ト云ヘル希代ノ早道
ナリ。或時何か大切ノ御用水戸へ仰セ遣ハサルヘキシ
御失念アリ。評定日ノ朝ニ至リ思召出サレ年寄中
ヲ召サレ御相談アルニ是非今日御國ニテ御達シノ
御用度レテハ御不手都合タリ去リナカラ。今至
テセンスヘナシ如何ハセント詮議マキナル処小宮山
仁工門ヨリ古今希ナル早道ナリ是へ仰セ付ラレ
ナハ今日中ニハ御國へ達スヘシト御近習ノ人申ス

ニ付早ク仁工門ヲ召サレケルニ幸ニ當番ニテ御殿ニ
リケル故直ニ御前へ召サレ御急ノ御用今日中ニ
御國元マテ達スヘキヤト仰セアルニ仁工門裏今セツ
比マテニハ必着可仕ト御受申上御用状ウケ取り
御殿へ袴扱ステ草履ノマテテ奈足シケルサテ御
國ニ於テハ各評定所へ寄合急御用ノ一件昨日
コテニ御沙汰アルヘキ筈ノ処今ニ御左右人無キハ何
サマ珍事ニテモ出来タルヤ心元ナシ早飛肺ヲ以
テ伺フヘキヤ去ルニテモ今日ノ御間ニハ不合一ト各案
ノ煩ヲ処ニ尽ハヨニモ成ラン歎ト思フ比仁工門評定

所に着江戸表ヨリ急脚用ノ事ニテ只今來着セ
リ年寄衆エ直ニ申述ル音アリト申入レタルニ
ソ皆々扱コソト仁エ門ヲ呼出シ對面アリシカク脚直
ニ脚頼ノユヘヲ以テ急キ馳下リシ次第ヲ述ヘ脚用
状ヲ出シケレハ一同安堵シ仁エ門カ駿足ヲ感シ慰勞
シニ三日モ休足シ登ルヘシトアリシカト公ニモ左コソ
脚案シ遊ハサレシ直様上ルヘシ去リナカラ脚返簡
出來ノ間母ニ對面セントテ丘軒早ノ宅ニ至リ母ニ
逢ヒセツ前ニ評定所ニ至リ返簡ウケトリ祭足其
夜ヲ過小石川ノ邸ニ着其段言上ニ及ヒシカハ

公甚脚悦アリ脚褒美若干ヲ賜ハリシトナリ 小池氏筆

記

一義公常ニ紙ヲ惜シ玉ニ脚隱居ノ後ニハ外ヨリ來
書簡ノ裏紙長短ヲカフコナク継カセラレツカワセラレ詩
哥ノ稿ニハ及故ヲ用ヒ玉ニ脚疊ニ水コホレタルニハ布木
綿ノ切レニテ拭ハシムラレ奥女中ヘタヒ紙ヲ費
スヘカラストアリケルハ費多キユヘ女中ニ寒中命
漉ヲ觀ヘシ甚オモシロキ物ナリトアリテ松ノ草
村ニ女中大勢ツカハサレ兼テ紙スキ場川ノ上ニ棧
敷ヲ作ラセカラス箕ノカキノ上ニムシ薄ヘリハカリ

四方吹拂ニシテ人男女水中ニ入働ラクヲ觀セシ
キラハ如中元大キニ寒氣ニ添シ人歸リテ後自分
寒ニ堪ヘ兼シト又命スキ共ノ苦シム様子委細申
上ケレバ公右ノ如ク命ハ容易ニ製長シカ冬キモナレバ
常ニミタリニ費マスハカラストハ戒シメタル也ト仰アリ
シ同上

一季姫君下年セオモク御ワツラヒ復ニ至リテ暑ナラ
御恐ヒ兼テ候ヨシ 義公聞シ召レ早速唐箕
ヲツツ御トリ寄セ御次ノ間ニテマワサセ玉ヒ候ラ
ハ涼風御坐敷ヘ吹入りアタリモ秋ノ如クニテ

忽チ暑ヲ御ワスレナサレ候然レトモ世上ニテ主人タル
者ノワヅカノ病氣亦ハ己カ安樂ノタメニ下ヲ常ニト
タム事ヲカヘリ見ス榮耀ニテホシヒマニ事ヲ致シ候
ヲ甚御キラヒナサレ候 西山遺事

一將軍家密々ノ御相談ニ付御出府可有之由ニテ
義公則江府エ御着アリテ御登城アリケレハ
御對面有テ御饗食應共アリ其後密々ノ御相談
相スニ早速御暇下サレ江府ヲ御立其日未夕日
高ナレ共如何ナル故カ千住ニ旅宿スレト有テ
千住ノ御本陣ニ入ラセテ其夜ハ御夜詰ニ殊

人外早ク引ケ何レモ休息スヘシ出有リケレハ御本
陳ニテモ下宿ニテモ皆々早ク休息スル時
節ヲ考ヘサセ玉ヒ御近習廻リノ衆ヲ御呼アリ子
細アレハ唯今ヨリ夜中ニ江府へ可罷越候間馬一疋
拵ヨ供廻ハ馬廻三四人鑓ハ家中ノ鑓一本カリ持スヘシ
其外使者供ノ格ニ可致トテ即千馬ニ召サレ使者
ノ氣色ニテ道ヲ急キ外櫻田甲府中納言綱豊御
ノ御屋形へ御赴キナサル其時合ハ夜モ深更ニ成リケ
ル頃テ御門ヲ開カセケレハ内ヨリ誰ト問フコレハ水戸
中納言殿使者何ノ何某ト申者夜中ナレヒ急ノ

用事ニ付千住ノ御本陣ヨリ参リタリト有ケレ
ハ即千御門ヲヒラキ御廣間へ御通シ取次出向ニ如
何ナル御用向ソト有リケレハ義公仰セラルル主
人中納言殿申サルハ密々ノ御用向ニ候間御直ニ
一可申上由被申候間其段仰セ上ラレ候ラヘト有
ケレハ頃テ御耳ニ達シ綱豊御モ何事ヤラント思
ヒ召シ御出有テ水戸殿御使者是ヘト御呼ノ時次
ノ間ヨリニ千住出玉フヲ綱豊御目ト目ヲ御見
合思ハ御意アリケレハ義公是ハ水戸殿使者
ニテ御坐候密カ申上度御口止リ赴御坐候間御

次ノ衆ヲ御退ケ遊サレ候ラト有リ也此綱豊御ニ御
推察有テ即チ御側ノ衆ヲ遠ク御退ケ見ヘク
ト御招キソコニテ常ノ如ク御挨拶有テ暫ク御物語
相スニ又飛レサツテ使者ノ挨拶ニテ御立アリ夜ノ内
ニ千住へ御歸リアリシトナリ 武林隱見録

一威公義公御代ニ御家士ノ中刑セラル者アレハ必如
此ノ故ヲ以テ斯刑セラレ、昔諸士一統ニ仰セ出サレタ
ル趣諸日記ニ見ヘタリ。元禄二年己未暮大目付
望月治五門御用ニテ召サレ候ラヘ此不罷出於宅自
殺仕相景候ニ付御家中へ廻状ニテ御見セ遊サル字

望月治五門御用ニテ召サレ候ラヘ此不罷出於宅自
殺仕相景候ニ付御家中へ廻状ニテ御見セ遊サル字
此ノ故ヲ以テ斯刑セラレ、昔諸士一統ニ仰セ出サレタ
ル趣諸日記ニ見ヘタリ。元禄二年己未暮大目付
望月治五門御用ニテ召サレ候ラヘ此不罷出於宅自
殺仕相景候ニ付御家中へ廻状ニテ御見セ遊サル字

此世より死に自擧るは死に移るに別命あり
予も亦死にたむれば死に移るに別命あり
此世より死にたむれば死に移るに別命あり
此世より死にたむれば死に移るに別命あり
此世より死にたむれば死に移るに別命あり
此世より死にたむれば死に移るに別命あり
此世より死にたむれば死に移るに別命あり
此世より死にたむれば死に移るに別命あり
此世より死にたむれば死に移るに別命あり
此世より死にたむれば死に移るに別命あり

偏に死にたむれば死に移るに別命あり
此世より死にたむれば死に移るに別命あり
此世より死にたむれば死に移るに別命あり
此世より死にたむれば死に移るに別命あり
此世より死にたむれば死に移るに別命あり
此世より死にたむれば死に移るに別命あり
此世より死にたむれば死に移るに別命あり
此世より死にたむれば死に移るに別命あり
此世より死にたむれば死に移るに別命あり
此世より死にたむれば死に移るに別命あり

勤候事 西野氏筆記

一犬高新エ門ト云フ郡手代アリ義公御存ノ者
ニテ市乞村無ニ赤寺御建立ノ時役ヲ指揮シ
切アリ義公彼寺ニ入御アリ也ニ水石ノ居様
御意ニ満タス屢置カヘサセラルトイヘ氏大石ニテ思
召ニ應セヌ時ニ新エ門コノ所ヘ出テ御意ヲ伺ヒ元
来力量衆人ニ超ヘケレハ思シ召フニ居ヘケレハ甚
御意ニ叶ヘト是ヨリ前後シハク勤切ヲ尽シ
ケレハ輕キ役ナカラモ御カヲ賜ヒ称美セラル其後
数年ヲ経テ肅公御代ニ至リ松並勤十郎ヲ御

用ヒ御改改ノ時勤十郎太田木崎又磯部ノ並松ヲ
代ラント云レテ新エ門兼リコレハ西山公御意ニテ
木崎ノ松ハ水戸ヨリ目當ニナル処ナリ又磯部ノ並
松ハ左右皆水田ナレハ暗夜雪吹等ニモ旅人ノ道ヲ
失ハサル為ニ植ヘサセラル標^{レシ}ナレハ後世代ルヘカラ
スト仰セナレハ決シテ此ヲ止メラルヘキ旨勤十郎ニ
向ヒ強テ止メケレハ其事ハ止ラルトイヘ氏新エ門ヲ
輕キ身柄トシテ重キ役人中ニ對シ不敬ノ申分
無調法ナリトテ後日ニ頭ヨリ暇ヲ申渡シケレハ
新エ門ハテノト涙ヲ流シケルユヘ頭是ヲ見テイ

カニモ小給ノ其方今又御暇ヲ賜ヒテハ妻子春族
ノ養ニモ指支エニテ察シ入ル処ナリ去ナカラ其方
日頃ノ氣象ニ似ス落涙ハ余リノ事ナリト申ケ
レハ新エ門眼ヲツクツト見聞キコレハ情ナキ仰カテ
夕トハ妻子ハ飢餓渴命ニ及フトモ何ソ落涙セン先
日本崎ニ於テ勤十郎ニ對セシ時指チカヘテ死セザ
ルヲ残念ナリ民人客ヲナサンテ此人ニアリコレ
ヲ思ハハコソ落涙ニ及ヒト申ケリ先人清閑話
一義公御代ノ比五軒町今番取氏ノ屋敷ニ住セシ人
名ヲ忘
レテリ極テ久負ナリ此比ハ馬持タサル士ハナカリケル

カ此人ハカリ持タサリケレハ一町ノ輩氣ノ毒ニ思ヒ寄
合テ馬ヲ買ヒ彼ニ立テサセント内談シ日以入魂ノ近
隣ノ人ヲ以テ斯ト告シカハ近比忝キ由ヲ謝シ其
夜出奔シタリ跡ノ様子ヲ見ルニ武具馬具ヲカサリ
具足箱ノ中ニ軍用金若干アリ書置ニ我等久負
窮ユヘシノアルカシキ馬ヲ不持シカシ万一ノ時ハ斯ト
心當ハセシカト今更申合ケ立カタク谷ノ下スニ預
リ何ノ面目アリテカ再ニ面ヲ會スヘキ故ニ出奔ス
ト書タリケル當時廉恥ヲ知レル士風忻慕スル所
一ナリ

一義公御在國ノ時柵町伊藤玄蕃長屋ヨリ出火コノ
時跡部彦九郎御先余物頭ニテ組子ヲ率ヒ早速
ハセ着比類カキ働ナリ其カハ長屋半ハハ焼テ半ハ防
キ苗テ焼サリケル義公ニモ柵町御門ヨリ出御云
蕃向ノ芝付ニ御床ルニ腰ヲカケサセ玉ヒ右ノ働キ
ヲ上覽アリ御近臣ヲ以テ彦九郎ヲ御称義アリ且
今日組子ノ内拔群ノ働キハ誰々ナルソ申上ツヘシト
ノ也彦九郎御答申上ルハ拙者工御預ノ組子二十人
一人モ不働キノ者ナシ別シテ名前申上ルニ及ハスト申
ス公ニモ甚タ御悦ヒニテ隊長タル者ノ申合尤ナリ

ト御称義ナリシトナリ 先人清岡話

一彦九郎江戸在番ノ中御長屋焼失ノ由御国屋敷へ
告ケ来ル石川彦九郎ト云用達アリ是ヲ聞トヒトシ
ク具足箱ヲ脊負昼夜ヲ別タス馳セ登リ主人ニ對
面シ具足箱ヲ渡シ申シケルハ火事ノセツ旦那定
テ御殿へ誥ラルヘシ左スレハ具足焼失心元ナシ此物
斥時モナクテ不叶中間小者ニ預ケ越サンモ安心セズ自
身脊負テ登レリ御渡シ申セハ安堵セリ空腹ニテ
リタレハ湯漬ヲ一盃賜ラントテ草鞋モヌカス食
シケリ彦九郎モ其忠志ヲ悦ヒ其方久シクナリニ

テ江戸エ登帳タレハ六兩日モ滞 留所見物ヲモ
シテ下ルヘレト云ヘハ彦房エ門腹立誠ニ余議ナキ事
ニ自身登レリ 昔居ラスハ内ノ御上ヲハ誰カ守
護スヘキ見物処ニホ甲ラストテソカニニ食事ヲ
トノヘ下リシトソノ先人清閑話

一義公御編集ノ礼儀類典五百十五卷 良公御
代傭書生百人莫太ノ費用ヲ以テ成功享保十
九年十月六日 幕府へ進セラル其本
幕府ヨリ 禁裏へ献セラル大嘗會ノ御祭ハ
後醍醐帝ノ御時行ハレシマニテ退轉シテ其式

法モ考ヘカタキ事ニナリ行シニ進献ノ類典ニテ其
御式極リ元文三年十二月十八日ヨリ二十三日ヲ始
テ行ハル御費用ハ 幕府ヨリ進セラル九金三十八兩
兩ナリ諸司代ヘモ一万五千兩借シ玉フ下度御再興
アレハ以来ハ御費用ナシト云ヘリコノ後ハ御即位ノ
毎度ニ此例ヲ行ハルト云 見聞録

一義公文武ノ事ニ御心ヲ用ヒ玉ヒシフハ申モ更ナルヲ
ニテ桃源遺事ニ詳ニ御事業ヲ載セタレト大細
事ノモレタル下モ少ナカラサルニヤ禽獸草木等
此国ニナキモノハ他国ヨリ悉ク求メ玉ヒシヲモ遺

事ニ見エシリ師藤間弥兵衛ニ下良公之御弓ヲ仰
ヤ付ラレシニ良竹コレナリ所々ノ竹ヲ以テ製衣シケレ良
弓ニアラサリケレハ如何セント云フ中何人カ申タリ
ケニ御城中奥方ノ後ニ有之竹ハ義公城州八幡ノ
竹ヲ移シ植サセ玉フト云フエ此竹ヲ以テ製衣シケレハ
極メテ良弓ナリシトソコノ類ノ事何程モアルヘキ
ナレト今其傳ヲ失フコト多カルヘシト云リ皆川善有話
一義公御隠居ノ後太田昇下邊ヨリ里ノ宮ノ方エ
ノ細道ヲ御獨行遊ハサル兼テ其御用意ナリト
見ヘテ賤シキ奉公人ノ躰ニ御出立御供ノ面ツハ

皆ソココニ散在シテソレト知レサル様ニ守護シ奉
ル段々コノ道ツ助ヲ御歩行ノ処獨ノ老人行手ニ樽
ヲ携ヘ斤手ニ平目魚一枚ヲ提ケ行クニ追付玉ヒ御
老人何レヘ行き候ト問ヒ玉フ老人我ハ白羽村ノ者ナ
リ今夜孫ニ娘ヲトルニ依テ大田ニ行テ湯酒ト肴トヲ
買テ行クナリト申スソレハ目出度事ナリ我等ハ且
那ヨリ知行所ヘノ用事申付リコノ近村ヘ参ルナリ
一人旅行ナレハ咄レナカラ参ラズト仰セラレ扱西山ハ
黄門様御隠居ニテ度々此邊ヘモ御出アルヨシ定テ
御百姓ノ邪ニナリ玉ハント仰セラル老人イマノ

西山様ホトアリカタキ殿様ハナシ田畠ノ側御通りノ
節耕作ヲヤメ蹲居イタセハ汝ヲ何トテ耕作ヲ
ヤメタルソ汝等ハ家業ナリ我ハ樂事ニ出テタル
ナリ耕作シテ見セヨト仰セラルマ御意ニ任セテ丈
クノ働ヲナセハ御機嫌能御覽アリ又御道ス子
先キヨリ人馬ノ来ルヲ御覽アレハ丈トナク脇道
ノ方へ御廻リ遊ハサレ更ニ農業ヲ為ス者ノ障リ
トナルヲハ厭ヒ玉フ若キ者ナト御通りヲ拜見
セント耕作ヲヤメテ御道筋ニ馳セ来ル者共ハハ
汝等急リテ親共ニ吃ラレハ家業ヲ出精スレ

ハ親共モ悦フナリサスレハ孝行ハ外ニハナシ耕作
ヲ精ヲ入ルノミナリナト御誠メ遊ハサル親共ソ
レヲ羨リテハ有リ難ク存シ却テ西山様コノ邊へ
御入りアレカシト御待申スフナリト申ス又仰セ
ケルハ西山へ御相手トシテ近郷ノ富家ナト大勢忝
上スルヨシ渠等殿様ヲ御相手ニ取りカスノ奢リノ
心ヲ生セン又ハ御相手ノ折カラニハ自分勝手ノ事ヲ
申上ナハ亭御政事ノ御妨ケニモナリナニカ老人其
事ハ委細ニ存セ又事ナレ氏追々羨ル廻参上ノ者共
へハ却テ色々御教誡共アレハ其趣ヲ家内ノニモ

傳へ御隠居以前ヨリノ御仁惠モ染込居ルユヘ目ノ
アタリ拜シ奉リ猶以有リ難サモ弥増シ万一支配
所ナトノ非議ノ裁断依怙顯負ナトモ以後ハアル
コト一同安堵ノ思ヒヲナセリナト御物語申ス内モハ
ヤ白羽村ノ内ニ至リケレハ老人貴様陰ニテ腰ノ痛
キヲ忘レ遂吾家ニ着セリ幸ヲ推サヘタル一樽モア
レ一杯進上セン吾家へ立寄ラレ候ラヘト申ス未
タ主用ヲモ達セサレハ戻リニヨリ立寄ラント仰セ
アレハ達テト云フテ御手ヲトリテ進メ申ニソ
公甚タ御迷惑遊ハサレ御手ヲ拍セ玉ヘハ御供ノ

族此彼ヨリ馳セ集リカシ付キ奉ルヲ見テ老人大
キニ驚キ吾家へ逃ケ歸リ其子ニ語りケレハ丈レハ
恐入リタルヲナリ婚礼所ニコレナシ先ツ入寺シテ御
免ヲ願ハント増井村正宗寺へ父子共ニ入寺シテケ
レハ正宗寺早速西山へ参上スレハ公ニモ最早還御
ナレハ右ノ事ヲ申上御免ヲ願ヒ奉ル公聞シ召レ老
人知ラサルハ尤ナリ知ラサル上ハ無調法ニアラス早
ク家ニ歸テ婚儀ヲ整正ヘヨト可達ト仰マアレハ正
宗寺有リ難ト御礼申其旨ヲ達シ歸シケリ
丈ヨリ程歷テ公右村へ御成アリ彼老人カ家ニ

臨之玉之節居此カト仰也子ルエへ庭へ出云拜伏ス
六御杖ヨリ御金一包出シ玉之給ハリケルボナン
先人清閑

入吹微文化中白羽ノ庄次兵衛後藤ナル者所ニ至

ル此者譜学好事ノ者ト嘗テ聞シニ依テナリ談

話ノ中本文人事ヲ問ヒケレハ庄次兵衛カ曰其

老人ハ則吾カ祖先ナリト云フ其大凡本文ノ

説ト合ス

一穂坂八郎エ門ハ威公御代ヨリ勤仕シ段々御取立

寛文ノ比ニハ老中トナリ專ラ精勤ナリシカ其

妻ハ大森五郎エ門カ女ナリシカ子ヲ設ケサルヲ憂

ヘテ何卒好計ヲ廻ラシ他ノ子ヲヒソカニ養テ已

カ子ト称シ家督ヲ継カセント思フ折カラ古宿村

邊ノ猿蓑ノ女房出入ニテ時々来リシカ姫身ノ

由聞テ大キ悦キ密謀ヲ申含メ事成スハ汝等支

婦ニ莫大ノ賚セント申ニリ賤シキ者ノ習ヒ忽ニ美

知セシカハ支ヨリ懐胎ノ躰ヲナシハ郎エ門ニモ告ケ

レ其悦ヒ我五子ニ余レヒ一子ナキヲ悲シシニ天

ノ子フル処願フハ男子ヲ産メカシト喜ヒケリ妻七

八月重ナルルニ是其様ヲナシ密ニ古宿村ニ人ヲ附

置キテ彼方ノ様子ヲ聞カセシニ最ハヤ産タリトノ
注進アレハ此方ニハ産ノ氣アリト披露ニ夜ニ入ルヲ待
テ縁ノ下ヨリ彼生子ヲ廻シ唯今安産セリ然モ男子
ナリト告ケタリテハ八郎エ門ハ勿論親戚ツトモ来
リテ喜フ事限リナシ撫育寵愛シテ稍五六歳ニ
モ至リケレハ願ヒ奉リテ義公ニ拜謁セシム時ニ其
期ニ臨ニテ此見シキリニ泣キ叫ビテ御前ニ出テ兼
シテ漸クニコシラヘタマシテ謁ヒ奉ル義公ノ兒ヲ
電覽マシマシテ何カ御鑑定ノ事モアリケルカ穂坂
カ子ニハ似合ヌトハカリノ御意ナリシカ程ナク彼密

計アラハレ天和三年亥九月妻女ハ眾科ニ處セラレ
八郎エ門此奸計ヲ知ラサルヲ以テ同時ニ切腹セシム
水府系纂及小田部守庸話

一三木左大夫致仕シテ縁翁ト云フ嫡家仁兵衛致仕号ノ
未男ナリ兄左大夫之幹ノ養子トナル又別所老年
ニ及ニテ妾懐妊ス義公聞シ召サレ渠必破産セント
思シ召サレ臨月ニ及ニテハ木村権之エ門命ヲ奉シテ
仁兵衛カ宅ニ詣メ居レリ出產スルト直ニ用意ノ乳母
ニ抱カセハ公ハ折節箕川村縁ケ岡ニ入ラセラレシ処
へ往テ権之エ門其趣ヲ言上ス即千御前へ召サレ

緑カ因ニテ謁シ奉ル且公其姓ノ三木ニモカナヘルヲ以
テ名ヲ緑之介ト給フ致仕ノ時モ其緑ヲトリテ
緑翁ト称スゴノ人長壽ニシテ明和中九十餘歳ニテ
没ス

一富田信濃守知治 東照宮ノ時豫州板島十一万ニ
千名ヲ領ス先是勢州安濃津妻ノ兄坂崎出羽守直
盛下諍論ノ事ニ依テ領知ヲ没収セラレ奥州岩
城ノ城主鳥居左京亮ニ召預ケラレ寛永十年病
死ス其子藤五郎知幸父ト共ニ岩城ニ移リ父死
シテ赦免セラレ仙臺ニ往テ伊達家ヲ訪フ仙臺

炭ノ曰今浪人ノ身トナリテ諸國ヲ經歷セシヨリ
吾許ニ居ラルヘシ三千石ノ合カセントアリシニ藤五良
愈テ吾子トト父懇意ノ勛目アルヲ以テ尋子
来レリ三千石ヲヘントハ家臣ト為スノ意ナルヘント
テ速ニ去テ江戸ニ至リ剃髮シテ宗清ト改メ家士等
ノ所緑ニ依テ明曆年中常州石塚ニ来リ住ス今其地ノ
跡以土人宗清山ト称セリ寛文十年戌十二月 義公ニ謁シ奉リ御
連枝隠居ノ次坐ニ列ス先是時ヲ使ラ宗清時ニ申上シ
ハ某光境ニ至リ露命且夕ニセマレリ重テ御帰國
ノ時謁シ奉ランフハ思ヒモ寄ラヌ願ハクハ思息左

近某同意ニ御懇命ヲ賜ハルヘシト 公其元ノ壯
健幾回ニ會面セシオレ左近事ハ氣遣アルナ
近習ニ召仕ハント仰セアル宗清涙ヲ流シ誠ニ辱キ
次第ナリト拜謝ニ奉ル同月廿七日左近知目三百石ヲ
賜ヒテ小姓トナリ後小平太ト改メ段々出身シテ大
番頭ニ至リテ終ル嘗テ御小姓ノ時藤堂和泉守小
石川郎ニ来ラル左近茶ヲ持出セシニ 義公泉州ニ
向ヒ玉ヒ此者ハ其元ノ先城主富田信濃守カ孫ナリト
仰セケレハ泉州左候フカトテ茶碗ヲ取ラス茶臺ノ俣
取リシトナン水府系纂并
先人清閑話

一義公御代末ノ比ニヤ下町何レノ武藝統音古場ニテカ
有リケン一又ノ旅僧来リタニスニ居レリ統音古ノ人々
何者ソト尋ヌレハ其ハ六十六部 終行ノ者ニテ候カ經島
定工門殿ト申ハ此邊ニ候ハヤト云フ 今ハ其人病死セ
リ何故コレヲ尋タルト云ハサレハニ候事長キコナカ
ラ物語申サン其ハ奥州ニ住シテ追剥強盜ヲ業トス
男子二人アリ何レモ志剛強ニシテ共ニコノ惡業ヲナス或
夜父子三人人家遙カニ遠キ所ニ出テ一町ハカリツ其
間ヲ置テ旅人ヲ待ツ夜半比トモ思レキ比遙ニ謡シ
ウタウ声聞ユイツレ旅人ナルヘレ彼方ノ方ニ嬌子ヲ

伏せ置きたるハ定て此者仕留んと思ふ処果して其居タ
ラント思ふ所にて謡ノ声止むタリ相違アラント察
スル処間モナク謡ノ声聞ユ是ハ何ヲモ持タサル雲介
ノ類ニヤト思ふ内又次男ヲ伏せ置きたる邊にて謡ノ
声ヤムト程ナク元ノ如ク謡フテ来ル何様アヤシキコ
ニ思ヒ待ツ処ニ間モナク前へ通りカニル其躰ヲ見ル
ニ木綿合羽ヲ着シ長キコヲ帯セリ何トテ忤共ハ
出合サリケルヤト段々来ルヲ待設ケテ物陰ヨリ
飛テ出レハ此人尖シモサハカス又コニモ悪黨共居レリ
無益ノ殺生ナカラト云フコニ抜付ル某モ抜合セ

シカト其太刀勢ニ恐レ不思跡へ引ト思ヒシカ眉
間ヨリ骨ノアタリ道ハラカキニ切下ケラル故仰
ノキニ仆ル浅疵ナレモ所詮勝ツヘキ勢ニモ非サレ
ハ死セシフリニテ居レリサレ共コヲ放タサルヲ見テ
彼人カヲ以テ我カノ切先ヲ押へ左ノ手ヲ以テ口ハカ
サシ呼吸ヲ試シ此奴太キヤツナリ死セシ躰ヲナシ近
寄ラハ足ヲ拂ラントス汝如キニ謀ラルヘキヤ我ハ水
戸家経島定エ間ト云フ者ナリ兄ノ敵ヲ討ンダメ
此國へ来シリ命冥加ノ奴カナト獨言シテ立上リ又
初メ如ク謡フテ過行キヌサテハ恐ロシキ人モ有ルモ

ノカナト思ヒ声ノ遠クナルヲ待テヤウク起上リカ
ヲ杖ニ次男カ伏シタル処へ行テ見ルニ躰ニツミナリテ
アリ次ニ嫡子カ居タル所ヲ見レハ又斯ノ如シ夫ヨリ悟道
シ出家トナリ諸國經歷此國ニ来リテハ先ツ經島氏
ヲ尋子ジト思フ折カラ誓古ノ音聞ユルマサシモ劔
術達人ノフナレハ今程本望ヲモ達シカニ指南セラレ
ヘシト存シ御誓古場邊ヲ徂徠御セリト始終ヲ物語
ケルトナリ 小宮山氏并
菽谷氏話

一義公ノ御時伊藤七内原忠工門侍坐セリ 公七内ニ
ノ玉ヒシハ其方同列ノ内坐頭共ヲ招キ三味線ヲ

聞又按摩ナト取ラスル由大役ヲ勤ムル者ハ間ニハ氣ヲ
ツツロケニハ少シハ遊興ノ事モアルヘシ又不杖ニハ按
摩ヲモトラマ相手ニモスヘキ事ナレ氏執改ハ竹助ヨリ
出ルヨリ外ハ家中ノ風ヲ聞テハ甚密ニナル事アリ坐
頭ト云フモノ諸家ニ出入多ク其内ニ馳走ヨキモノソ
ハ譽メソヤシ非ナル者モ是ニ云ヒ先方ニテ余リ好マヌ
ヲハ愛相ヨカラヌヲ恨ミニ思ヒ無キフモ取繕ヒウハ并
ノ云フモノナリ左ナキモアルヘケレ氏坐頭根性ト
テ十人カ七八人ハ妬アルモノナリ以來ハアコリ近付
ケサルヤフニ申ヘシウタニ結ハ盲目女ニテ可ナリ按

摩ハ家来ニナリトラセ病氣ナラハ針醫ニタムム
ヘレ邪ナルコトモ一度ハ疑ヒニ度ハ左モアラニカト思
ヒニ度ニ真ナリト聞ウケルフ凡人ノ情ナリ是ノ
ニ限ラス人ノ輕薄ニテ身ノ上ヲ譽メソマシ又ハ賄
賂ノ音信等モ一度ハ輕薄ト心付ニ度目ハ例ノ通り
トハ思ヒナカラ忝ト思ヒニ度目ハ眞實ナルコト思フ
ハ人情ナリ役人ノ第一慎ムヘキナリ忠工門ナトモ
專一ニ心カクヘレ右等ノフ我耳ニ入テモ一度ハ疑ニ
度ハ左モアルカト心付ニ度キク時ハ咎メハセス内心
ニ狭ムトキハ何ソノ時タメニナラヌ事アルヘシ盲人

ナトノ申事ニテ改事ハカリニ限ラス家中ノ者ノ事
ヲ無實ニサケスニテハ弟一明友ノ信ヲ失ヒ人倫ノ道
ヲ欠クナリ都テ佞媚ノモノ虚ニ棄スルモノナリ尚
更執政ノ人ハ筋ヨリ申出ル事ニテモ再三紕スヘキ
事ナリ家中ノ事勿論早賤ノ者ノフニテモ太功
ノ事ナリ我等モ若キ時既ニニニ度聞アヤコラントセ
レ事アレヒ其後ハ容易ニ事ヲヤセテ宣ヒレカト
見聞録

一義公御代松野州村相八兵エトイヘルハ盜賊ノ
頭ニテ一昼夜ニ三十里ヲ往來シ忍ヒノ術ニ達

セシモノナリニ三十日ノ内ニ其ノ領内ニ
義公ノ尊慮ヲ以テ助金仰付ラルハシ
涯ニ人月俸ヲ賜ハリシカハ恩恵心有難キニ感シ
吾人等ノ有ニカキリハ御領内ハ盗賊立入ラセマ
シキト云ヒシカ果シテ彼力存生ノ中ハ夜盗ノ憂
ナカリキト先人云傳フ又那賀侵村ニ喜兵丁
十イハル博徒アリ剛強ナル者ニテ其徒五百奈人
彼力手下ニ属ス常ニ云ケルハ方一非常ノ丁ア
ラシニハ吾徒ヲ以テ一方ノ虎口ヲ持ツヘシト
軍學子シモ學子ト博徒ヲ專ラトスルニモアラス

任俠ヲ事トスト聞ヘタリシカハ此喜兵丁モ
又
義公ノ御聽ニ達シ元禄元年三月朔日御用ヲ
一モ相違ニ可申者ニ有之トノ丁ニテ二人月俸ヲ
賜フ

一 本文ハ八兵工喜兵工ホカ如キ全ク盗賊ノミ
一 防カセラルメタメニモアルヘカラ又御隣國ノ
一 変事ホラモ告ケ間者ニモ御使ヒ被遊シ丁
一 ナルヘシ
一 義公御代紀伊公ト仰合ナレ御馬具ニ御紋ヲ付

ハカレハ眉ニ出来タル痛ノ首ヲ押ノケルヤウニ執
ハカリニナリテ其身ハ無用ノ人トナリ候ト申
ケレハ甚御感アリテ流石ニ親カ子ナリト仰アリ
御側ノ衆ハ宮内カ我ホ申付タル能ク度ニウケカワ
又丁イカ様ニ思慮アルヘシト思ヒケルニ我ホカ所存
ノ通リテ満足ナリト仰有レ一兩年ノ内ニ政事ニ
モアツカリシトノ 白石紳書

按系纂廿九山田利見高重初名清三郎祖父ヲ熊
谷大膳亮ニ関白次高吉次ノ家老也秀次公
生害ノ時自殺父ヲ山田徳九エ門武宗ト云父

大膳自害ノ時幼稚タリ家臣山田徳九エ門ト云モ
ノ武宗ヲ携ヘ田舎ニ退キ自ラ子ト称シ成長ノ
後山徳九エ門ト云向升将監推奉元和九年

威公ニ奉仕供ハ姓タリト云

一義公御代随留後瑞意ニ改ム相誥候者共 御墓所ニテ勤方ノ
候若林善也篠崎自閑ヨリ伺出候処延宝二年丁巳八月
十八日左ノ通御達アリ

覺

一印墓 随為ノ丸墓 徳九ノ墓 延宝二年七月廿九日 四仲墓系此等 徳九ノ墓

一 泚墓玉標し ちの只々止若林墓也 斗り中

一 泚墓玉標し 自宗も斗り中 掃除可仕支

一 泚墓玉標し 中は標し 心金少し 本なり 大み伐中

一 四人し 掃除し者二人し 掃除し 掃除仕支

一 中より由り 若く下化りて 中

一 中より由り 若く下化りて 中

一 中より由り 若く下化りて 中

一 中より由り 若く下化りて 中

一 中より由り 若く下化りて 中

一 随為し 衣衣系は 心し内 葬墓は 仕り支

一 妻より 葬墓は 心し 仕り支

一 心より 葬墓は 心し 仕り支

一 心より 葬墓は 心し 仕り支

一 心より 葬墓は 心し 仕り支

一 心より 葬墓は 心し 仕り支

一 義公御代 御徒目付 館四郎兵工 御城泊り 番時 鶴殿平

一 次工門 姉氣色 散々 由申来り 御番相引 様子見届度

一 音申出 四郎兵工了 簡い夕 返し申 跡 御條目見

候うへハ父母妻子ノ外ハ相引事ナラサル御法ニ入申
出候奉行中判断ニ御条目ハ親妻子ト計有之兄弟ノ
事ハ無之候うへハケ様ノ節了簡シモ可致久ノ御後目付
ヲ指置レ候事ニ候間老中迄申達スニ不及事ニ候去リ
ナカラ御目付中申出ラレタル趣物語ノヤウニ老中エ可
達ヨシニ手別条ナク相済ミタリ 史館
旧話
一水戸公ノ御屋敷ノ廣間ニ人來リテ取次ニ對面シ某ハ小川
三左エ門ト申ス浪人ニテ候身不肖ニ候うへハ當時主君ト
タノミ奉リ度ト存ル願クハ外ニコレナクハ當世ハ偽者多ク
物ニ給レハラへハ御義引有ルヘキに存セス然ハトテ誰ヲ頼ム

ヘキ便リモナリ此下スレヨキコシノシ憐ミツタレサセ玉フナ
ラハ身ノ悦ビナリ左モナリハ八幡ニ照覽マシマセ存命スベキ
心イサカモナリト申ケル取次ノ了簡ニ及ズヘキトニ
アラザレハ家臣ノカタクニ云入レシヲ宰相御キコシ召能
コリ思ヒヨリテ來レリ去ナカラ譜代ノ輩多ケレハ他所ヨリ呼
出サン事ナリ難キナリ余方シカセキハラへ浪人ノ事ナレハ
僅ノ指合ニモセヨ又時節モアリナシノ期ヲ待ツヘトテ白銀
三十枚賜ハリシ三左エ門畏テ曰私儀金銀ノ望ナシトイへ
氏御志ノ有難キ事ハ身ニ餘テ覺へ候猶ハシメヨリ申ス
如ク本懐相叶ヒセニアル時ハ金銀ハ空ナリ命スツル時ハ

只塊ニヒトシ御免被下候ラヘ是迄ニテハ御前ヨロシク
頼上ル御暇申トテ式臺ニ下リ抜手モ見セズ腹一文字ニ
カキ切テ伏タリ云閑ノ人ニシテトロキ騷キシカドスヘキ
様ナシ殿ニモキコシメシ世ノ中ノ人心ノニゴリタルコソ
ウタテケレ夫程ニ思ヒ極メシモノト知ラサリニコソオ
ロソカナレト幾度カクヤマセ玉ヒシトナリ新着御集

按ニ三左エ門ハ今小川喜エ門カ高祖父ナリ切腹セシ
延宝三年乙卯七月廿九日ナリ三左エ門カ子喜平太其
時末夕幼少ナリシカ其母カヒクシク守リタテ成長ノ
後父カ志ヲ継
シメントス既成長セシカハ

宗都宮弥三郎ニ就テ父カ志ヲ継何卒御家ニ奉
仕セシフヲ願フ此事弥三郎ヨリ義公ノ高聴ニ達シ
ケレ命アリテ先弥三郎附属ニナシ玉フ夫ヨリ八九年ヲ
經テ進物番ニ召出サレ諸役ヲ歴テ郡奉行トナリ二百石
ノ領自ラ父以來ノ事跡ヲ記シテ家ニ傳フト云

一上所八幡宮昔ハ四月五日ニ御齋幣ニテ中河内エ出御其後
三月十五日神興御祭礼ニナル昔ハ社務光明院依御坐候所
謂櫻本金性院地福院中ノ坊ト申今中ノ西櫻本ヲ指置レ
三年ニ一度ワ江戸エ公儀モクイニテ御目見登佐野八兵エエ
御正體ヲ拜ミ泰川ルラヘト仰付ラレ八幡ニ泰ル社務罷出

御内陣ヲ鈿ニ天明時ニ修理ハ御内陣ハ戸ノ脇ニ罷リ居御
正體ヲ拜ニ罷出ル時修理ハ兵工ニ何ソト問フハ兵工不申
秘事仕候由夫ヨリ拜殿ニ於テ宝物拜見望月四郎大夫
納ル陣カアリ是ヲ抜キ申ト若ハ兵工小指ヲ切り血流ル紫
威ノ甲冑コレハカリ御座由夫ヨリ中御殿ニ上リ侍ラハ
如何ト御尋ケ様ト申上ルラハ彼方様ニ左様ニ思召シ
タルト上意ハ申ソレヨリ渡里長者屋敷へ御移ニ遊ハルヘシト
道ヲテ仰セ侍ラレ候ラハ共社頭御坐候元ハ附城ニカカリ
ナルト公儀ヲ御様子中ノ西ニ御引遊ハル又後中ノ西ニ上町
鉄炮場ハ四十間四方土地下サレ御引ナリ山崎氏所藏筆記ニ

一義公御代延宝六年^{九カ}酉十月四日ノ仰出サレニ真野長兵衛儀身
體不罷成ルニ付拜借金ニ數多有之依之知行四百石之内三
百石召上ラレハ間水戸ニナル氏右卿ナリ氏勝手次第罷有俊約
イタシ百石ニテ暮シノ様ニト仰出サレ候ニ付御貸金奉行衆ニ
右ノ段申達ス由芦沢氏所藏筆記ニ見エタリ今モ諸士中
極窮ノ族モコレニ准シタトハ公納ニ無之相對借金等モ其
筋吟味ノ上半金迄濟トカ何トカ御了簡アリ知行切符ノ差
別ナク右負債多少ニ從テ年限ヲ定メ家内ヲ養フバカリノ
扶持ヲ賜ハリ禄ヲ召上ラレハ如何ト云フ人アリ此説是ナ
リヤ否ヤ

一義公御代ノ比府下白銀町ニ常盤才兵エト云ヘル磨師アリ
御家中何某トカヤ云ヘル人ノカヲ磨シニ其料ヲ遣ハサヌ故
シハク弟子某ヲツカヒ催促シケルニ兎角イヒ紛ラシテ不拂
或ハ在宿ニテモ留主ナリト云ヘト取次ノ者ヘ申付ル後ニハ
ワサト彼弟子聽ク様ニ高声ニ申付ケリ彼弟子腹ニ入カ子
才兵エニ向テ申ケルハ彼刀ノ磨料遣ハサヌノミナラス余リ
フニ付ケニシタル仕方ナリ何程ニ貴賤ノ差別アルトテモ
士ニ不似合不義理ヲナシ其上ニ此方ヲ嘲哂ノ致方堪忍ナリ難ク
候今一度催促ニ至ルヘシ必前ノ如クニモテアツカフヘシ其時ハ
フニ込討果所存候ト云フ才兵エ聞テ左程ニ存シ詰シ度

ナレハ留メタリトモトニマルヘカラス仕ヲフセタルナラハ自害
スルヲナカレ深クカクシテ出ルヲナカレト申合メケリ夫ヨリ
件ノ弟子ハ一カヲ推イツイモノ如ク行テ催促セシニ案ノ如ク茶ノ
間ニ居ナカラ他行ト云ヘト高声ニ聞ヘケレハ兼テ期ニタル度ナ
レハスト茶ノ間ニ踏込ナカラ切付ケレハ思ヒヨラサル度ニヘ
脇指ヲ取モナク切ラレケル彼者モ人ノ馳着ヌ内ト急キ
其場ヨリ出奔シケル此事官聽エモ聞テ其師才兵エ入獄
申付ラレタリ弟子是ヲ聞テワレユヘリ以テ師ニ難儀カケル
事勿躰ナシ名乗リ出ツヘシト思ヒケルカ師ノ深クカクシテ
出ルヲナカレト申セシ度ヲアレハ内々コノ度ヲ通シ谷乗リ

出ツヘシト思密カニ獄中ニ通シケレバ才兵士大ニイカリ名案
出ルヲナラハセ世道ノ勘當ナリト挨拶アリ是非及バズ又ハ
深ク其才ヲ忍ビ遠境ニヒソク居レリ年ヲ経トイヘトモ
彼弟子捕ラヘ得ナリシカハ才兵エカ罪ヲ免サシ過代トシテ
居物ノカヲ磨ノフヲ命セラル是ヨリ白銀町ノ磨師全ニ
例トナリテ此才ヲ勒ム云高倉氏話

一 望月五郎左エ門經濟ハ父五郎左エ門經隆ニモヲトテ又益
量人ナリ使役ヲ勤メケル時大森次郎左エ門ト同役ナリ其比
役ニ應セ又禄高ナレハ願ヒテ指上ル禄ナリシカ次郎左エ門ハ百石
五郎左エ門ハ七百石ナレハ古役ナトノ指回アリテ次郎左エ門ハ願ヒ

ケルニ五百石ヲ召上ラレ三百石ヲ賜フ五郎左エ門ハ願ハナリケレハ
同役ノ人ニ異見シケレ凡主君ノ家頼ヲ召仕ハルハ其人ノ
才不才ニヨリテ爵禄ヲ進退増減シ玉ナ然ルヲ此方ヨリ
私ハ禄多シ或ハ役不相應ナト申サハ主君エ御指回申ナリ何
レモハ免モアレ某ニ於テハ願ハスト申ケルカ段々昇進アリテ
後ニ老中トナリ禄ヲ増シテ千石トナル小池氏筆記
一 寛文ノ比ニヤ小妻徳田邊ノ百姓夫婦諍論セシカ夫大ニ
怒テ脇差ヲ以テ鞘ノ底打ケルカ鞘又ケテ女房ヲ切殺セリ
驚キ如何セシト思案スル内近隣ノ者畑ヲ耕スヲ見テ
急度思ヒ付テ彼者ヲ招寄セ斯マノ任損ミヲ成セリ

如何スヘシト云ハ此者ニ驚キ死體ノ傍ヘ立寄ル処切
伏セ近処ノ者共工不義ノ者兩人ヲ切留メタリ役人中ニ
詐ヘ等宜ク頼ミ入ル下云フニソ何トモ是非ナキ次第ナリ
トテ訥ヘ出檢使モ下リテ不義者ノ成敗世ノ常夫レハ
其通りニテ事済ミタリ右ノ奸計ヲ成セモフ誰知ルモモ
ナク三十年余ヲ過シケルカ何カ因人ノ変ニ依テ公儀ヨリ
御達フハリテ其変村ニテ百姓一統ヲ呼テ達ス事ナリ
其時カノ男モ行テ庄屋ノ達シテ受テ歸山路ニテ同道人者ニ
話シケルハケ様ノ変ハ何程天下ノ御威光ニテモ知レスモ
ナリ我若キ時惡変ヲナシタル変アリシカ終ニ知レスシテ三十

余年活キ延ヒタリサレハ知レス変ハ知レスニ済ムモノ也ト云フテ
皆カ己カ家ニ別レ歸リケル扱コハ皆ノ者共不審シ
活キ延ヒタリト云ハ死刑ニナル程ノ罪ヲ犯セリト見ヘタリ
如何ナル惡変ヲ成シケルヤトツフヤキケルニ其中心付タル
者アリ密夫ヲ切リシハ三十年餘ニモナルヘシ其時誰モ
不審セシハ渠カ女房不義ヲナセシ沙汰聞キタル者ナシ密
夫ト云ヒシハ男ハ猶以テ萬實ノ者ニテ左様ノ不義ヲナス
者ニ非ス然ラハ其惡変ト云フハ必定此事ナラント云フト
モトシク一同ニ相違アルコトト泰會ノ者共口ニ言ヒ合イ
ケレハ密夫ノ親類カノ女房ノ里方ニテモ其砌り疑ヒシコト

ナレハ彼是不審ノ条ト今度渠カ口走リニ趣共具ニ訴
ヘケルユヘ召捕ヘ穿鑿セシニ渠カ奸計悉ク白状セシマ重罪
ノ者トテ三十七年ノ後生胴様ニ行ハセケルトナリ同上

一 義公御隠居ノ比太田三小川宗印ト云醫師アリ或時彼カ宅エ入ラ
セラレタル時床工人磨ノ画像ヲ掛ケタリ宗印哥ヲモ讀ミ先ユヘ
義公御殿シニ人磨ヒト召レケル人磨ニ付各詩歌イタスヘマ旨
御供ノ面ニ御意アリ上ニモ御詩作遊ハサルヲ節鈴木宗與モ御供
ニテ歌ヲ一首詠シケルカ最秀逸ナリトソ其哥左記ス 智理安久多
ガッソ繪のそのもりけさ之は乃く
さくくさくくさくくさくくさくく

一 コレモ 義公御隠居後内藤右京大夫義泰朝臣江戸ヨリ
在所岩城ニ通ラレ時村松庵藏院旅宿トナル然ルヘキ金石
モタサレハ郡奉行岡見弥次エ門所持ノ金石ヲ借リテ館リ
置ケリ右京兆コレヲ見テ甚氣入り亭主ヲ呼ビコト石ハ
扱コ好キ石ナリ嘸秘藏タルヘケレハ無心申度トアリケレハ
庵藏院先ツ以テ御褒メ下サレ泰ク存候早速進呈申度
候ラヘハ其品ハ自分物ニ無之借以フ品ナレハ其主ヘ申
聞ケ追テ御返直申サント云ハ京兆其主ハ何ヲカ數寄ハヤト
申サル故馬ト石トソ平生好キ弄ヒ候ト申以夫レハ面白キ
人ト聞ヘ候若成ル直ナラハ 請ヒ受度存ヌルト夫ニ

テハ成ルマシナテノ好キ石ナリト再三存案ノラレ扱聖朝
早天ニ發足ユヘ竜藏院モ門前マテ見送り立返リテ坐敷
ヲ見レハ盆石ナシ其臺ニ奉書ノ紙ニ認メシ物アリ是ヲ
見レハ一首ノ和歌アリ
思ひきや遠たさきひの海山と
よいとゆ石乃上よふんむせは
コノ詠哥ヲ残シ石ノ主人ニ届クレ候様書付アリ竜藏院
驚キ早速 弥次為ニ斯小告ケレハ是非ナキトハ事ニテ詠哥
ヲ受ケトリ 西山ニ参上 義公エカク趣申上ケレハ左様
懇望アルハ本望シテ更ナリ殊ニ哥ヲモノ云シ置タルコナレハ

謝礼トシテ彼地ニ至ルヘシ返哥ハ其方不案内ニテレラヘハ
此方ヨリ遣ハスヘシトアリテ

おもひきや遠たさきひの海山と
よいとゆ石乃上よふんむせは

コノ御歌ヲ戴キ岩城ニ至リテシカクノ趣申入レケレハ京兆
ニモ逢ハレユルノ滞留アルヘシトテ種々馳走セラレ歸リハトキ
鞍置馬ヲ贈ラレケリ帰郷ノ後西山ニ参上 磐城ニテ次第
申上モラヒシ馬ヲ 御覽ニ入レケレバ 御意ニ叶ヒ献シ候様ニ
トソ更ニテ御召ニ奉リシト也 同上
義公御夜話ノ折コヒ或人申サツ五倫ノ中ニ夫婦ノ別ト

云フコト小学等ノ書面ハカリニテハ何事ヤラニホ念心ニ
カタニ如何カ侍ラニヤトオノコト申アヒケル時公仰ニ
曰ソレハイト心得ヤスキ理ナリオノコト妻モ名身ハ
ヲホヘ待ルラニ嫁娶ノ夜媒人侍女房御膳ナニクレト
程ニノ禮ヲツクリ互ニ衣紋ツク口ヒタヒナミ深ク九献
ノ盃カハシ新マクラトリノ後朝ノ對面モ何トナク
物ハツカハシクタレナシアヘル心モキヤカテ別ナリ是自
然ノ道理ニシテ他ノ教ニヨラス其心モキヲ後マテモ
ワスレスハ夫婦オカク睦マシク愛相ヨカルヘシサレト
年月フルマニ心ヤスキノ過キテ互ニ物ハツカハシキタレナシ先
氣隨ニナリモテユクヨリサマノアルマシキフルコトモ

シムクツケキ詞ヲモ云ヒ合ヒ待ルソカシ聖人ソコヲ憂ヘ
タマヒテカノ自然ノ道理ナル物取カハシキタレナシノ
情ニモトツキテ教ヲ立玉ヘリ夫婦ノ別ノミナラス都テ
人倫ヲ交リハタシナシノ情第一ナリタレナシハ敬ノ字モ
カヨフヘシ物ハキセスタレナシナケレハ禽獸ニモツトリモテ
ユクモノ也能ク辨フヘシト仰セラレケル頃機ナル御答
ニシテ然モ我等如キ愚カナルモ心ヲ得シ御教ナルヘシ年山紀間

Handwritten text in a cursive style, likely a letter or document. The text is written vertically on the right page of an open book. The characters are dense and difficult to read due to the cursive script. The paper shows signs of age, including creases and discoloration.

